

## 情報の批判的読解をどう教えるかー司書に求められる情報評価能力

有吉末充（京都学園大学 人間文化学部）

### 1、データベース化する世界 ビデオ上映『電腦コイル』

- ・情報はネットワーク上に遍在する
- ・欲しいときにアクセスして情報をとりだすー探求型からコンビニ型へ
- ・情報の選択と評価が重要性を増す

### 2、情報メディアの現状ーメディアは本当に信頼できるか

- ・テレビの信頼性  
テレビ放送の問題点  
放送番組基準ー総務省による保護とコントロール  
娯楽偏重ー60パーセントが娯楽番組  
企業ロジックの専横ースポンサーの意向を強く反映  
映像の真実性ー横行する「やらせ」、映像は真実だと思う視聴者  
7割の番組が低価格で下請けに外注ー無責任、社会的責任の無自覚
- ・新聞は信頼できる？
- ・マスメディアの限界  
限られた時間の中での制作  
利益第一主義（視聴率、販売部数）  
情報源とのもたれあい  
自主規制（とりあげられないテーマがある、スポンサー、系列、監督官庁等は批判されない etc.）
- ・メディアにとって情報は商品である  
メディアの上の情報は 選択されている 編集されている ときに情報は捏造される
- ・ウェブ上の情報の問題点  
ウェブ上の情報の問題点  
1、誰のチェックも受けずに情報発信が可能  
2、フロー情報で内容の保証ができない  
3、匿名性  
4、棲み分けのないバーチャル空間
- ・書籍なら大丈夫？  
書籍というメディアの問題点  
委託販売制度ー書店の在庫飽和、返品サイクルの短期化、出版種数の異常な増加、外注下請けによる安易な出版企画  
良質の本が十分出回っているわけではないー書籍も商品（消耗品）である
- ・すべての情報にはバイアスがかかっている  
評価を前提とした情報の活用  
事実はあるが、メディアに取り上げられた時点で様々に加工されている  
☆なにが「正しい」かではなく、全てが疑いうるという相対的な視点が必要  
→ 情報読解能力 の必要性

## 3. 情報リテラシーと情報の評価ー図書館利用教育と情報評価能力

- ・日本図書館協会『図書館利用教育ガイドライン「目標と方法」(総合版)
- ・『インフォメーションパワー』(*Information Power*. AASL.1998.)での位置づけ
- ・文科省の情報教育の目標 文部省調査研究協力者会議「体系的な情報教育の実戦に向けて」

- ・図書館は評価とどう関わるか?

図書館での情報リテラシー指導は文献探索法まででよい?

- ・批判的読解をどう教えるか

これまでの「情報リテラシー」や「メディアリテラシー」の枠を超えた、情報読解能力習得支援の方法を探る必要がある

- ・『情報の達人』に見る評価の基準

- 1 誰が書いているか
- 2 どこから出版・公開されているか
- 3 客観的にかかっているか
- 4 いつ作られたものか
- 5 どんな情報をもとにして書かれているか?

DVD『情報の達人』テキスト第2巻 紀伊國屋書店, 2007, p.22-25

- ・利用教育に「情報の評価」をとりいれる

公共図書館で司書がいきなり「メディアリテラシー」の指導をするのはまだ無理がある  
学校図書館や大学図書館では教科の授業と連携して、情報読解力習得のための指導を実施することができるが、それ以外に図書館に可能な方法で情報の評価を支援することはできないか?

- ・レファレンスの際の個別指導

メディアの特性の違い

立場が異なる著者による意見の違いなど

利用者によって指導できるときと、できないときがある

- ・メディアの作り方を学ぶセミナーも有効

- ・情報読解力の習得を支援する (1)

信頼できる文献やデータで検証することは有効ーしかしそれには訓練が必要

その調査を司書が援助ー情報の検証を支援する (図書館の資料で判断できるもの)

☆司書は調べ物の達人でなくてはならない

データや文献の取り扱いに精通していること (リサーチリテラシー)

メディアの製作過程を理解していること

- ・情報読解力の習得を支援する (2)

役に立つのは信頼できる人の意見ーしかし信頼できる人 (達人) を探すのは大変  
ウェブを利用できない人も多い

図書館が人のネットワークの入り口になる

司書で対応できない判断は、信頼できる人 (達人) の応援を求める

☆司書にはコーディネート能力が求められるー達人を探し出す能力

人的ネットワークを組織する能力

- ・ 司書に求められる 3 つの C
  - 1、批判的思考力 **CRITICAL READING**
  - 2、コミュニケーション（表現と理解）**COMMUNICATION**
  - 3、コラボレーション（情報の共有と共働）**COLLABORATION**
  
- ・ しかし批判的に思考することは難しい  
 批判的に考える訓練ができていない（従順をよしとする教育）  
 消費者意識、主権者意識が弱い（主体性が確立できていない）  
 権威や有名人に弱い（長いものには巻かれる）  
 他人との対立を避け、協調していたいという傾向  
 面白くない真実より楽しい嘘を選ぶ
  
- ・ そこで魔法のひとつ  
 おかしいと感じたらこう言おう なんだか納得できないな →**なんでやねん!**  
 これは疑わしいぞ →**ほんまかいな?**  
 批判的思考は「つつこみ」からはじまる
- ・ なぜ「つつこみ」に注目するか?  
 楽しくないリテラシーには人はついてこない  
 相対的視点を身につけるには頭の柔軟さが必要  
 弱者が権威に立ち向かうにはユーモアが必要
- ・ 「つつこみ力」という考え方もある（参考文献参照）
  
- ・ 司書に求められる 3 つの「つ」
  - 1、つつこみ=批判的思考力 **CRITICAL READING**
  - 2、つながり=コミュニケーション（表現と理解） **COMMUNICATION**
  - 3、つくりだす=コラボレーション（情報の共有と共働） **COLLABORATION**

## 参考文献

- 菅谷明子『メディア・リテラシー：世界の現場から』岩波書店，2001（岩波新書）
- 鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社，1997
- 竹内薫『9.9%は仮説：思いこみで判断しないための考え方』光文社，2006.8（光文社新書）
- 谷岡一郎『データはウソをつく：科学的な社会調査の方法』筑摩書房，2007（ちくまプリマー新書）
- 東京大学情報学環メルプロジェクト、日本民間放送連盟編『メディアリテラシーの工具箱：テレビを見る・つくる・読む』東京大学出版会，2005
- 野末俊比古『情報の達人第2巻：ゼミ発表をしよう！テーマ選びからプレゼンテーションまで・テキスト』紀伊國屋書店、2007
- マツタリーノ、パオロ『つつこみ力』筑摩書房，2007（ちくま新書）
- 水越敏行編著『メディアリテラシーを育てる（21世紀型授業づくり13）』明治図書，2000
- 森田秀嗣『メディアと批判的にかかわることを教える教育』『メディアリテラシーを育てる』明治図書，2000
- 山内祐平『デジタル社会のリテラシー』岩波書店，2003
- 岡田大輔「ときには別の視点で」『学校図書館部会報』No.25，2007.3.17，日本図書館協会学校図書館部会
- 近藤瑠漫、谷崎晃編著『ネット右翼とサブカル民主主義』三一書房、2007
- 尾下千秋『変わる出版流通と図書館』日本エディタースクール出版部、1998
- 渡辺武達『メディア・リテラシー』ダイヤモンド社、1997
- 講師ホームページ <http://homepage3.nifty.com/hoshikaku/>（ここからメールを出すこともできます）